緊急入院
～予期せぬ出来事（1）～

ベストセラーになった「終わった人」

内館牧子著「終わった人」は釧路新聞や四国新聞など全国八つの地方紙に連載された定年をテーマにした小説である。古い友人が山陰中央新報に連載されたものをスクラップにして送ってくれたので、単行本になる前に読んだ。

主人公は東大卒、大手銀行のエリートサラリーマン。二流大学卒のローカル民放勤めとでは格が違うが、同じサラリーマン、共感することも多く、いろいろと考えさせられる。

定年は社会的に「終わった人」とはいえ、高齢化社会の今日、死を迎える本当の終わりまでの間が長くなった。この期間をどう生きるかは終わった人にとって今まで以上に大きな意味を持つ。

定年後、この巡礼記を書かないかと誘いを受け、十年以上書き続けていることには自分でも驚く。結果的にはこれがライフワークとなり、私の定年後を大きく変えた。「生涯を輝いて生きたい」と思って来た自分も来年、喜寿を迎える。

今年の締めくくりはこの「終わった人」をテーマに書こうと決めた矢先、東京から同窓会の案内状が届いた。同窓会は「終わった人」の中でも大きなウエイトを占めている。

早速「出席」の返事を出す。同窓会だけでなく、東京に一週間ばかり滞在し、地方では観られないものを見て締めくくりの巡礼記のテーマを膨らませることにした。

ところが、予期せぬ出来事が起こった。先日、ペースメーカーと循環器内科の定期検診に行ったら、そのまま緊急入院となった。

確かに二週間ばかり前から風邪のせいか微熱が続き、上京前に何としても風邪を完治させようといろんな薬を飲んだ。その影響か、下唇がはれたり、腹痛などの症状はあった。長年の主治医が診察しても原因がわからない。

用心のため消化器内科・外科の先生にも診察、検査してもらうことになる。前回、下唇がはれた時も、耳鼻咽喉科や皮膚科でも診察を受けている。この時点で東京での同窓会出席中止を決断していたので、多少気分は楽である。

午前中に採血が終わり「このまま入院」と外科医に言われたのは午後七時。さらに「誰か家族の方が来てほしい」と言われ、離れた所に住む嫁に連れられて妻が来たのは夜十時前。

結論から言えば、急性虫垂炎の疑いがあり、すぐ手術したいが、血液をサラサラにする薬を常服しているので、一週間絶食して点滴しながら様子を見るとのこと。

今まで何度か入院したことはあるが、今回ほど動揺したことはない。何よりも介護保険の適用を受けている妻が、二週間一人暮らしができるかが心配である。

人生、予期せぬ出来事は誰にもいろいろある。それに冷静に対峙（たいじ）し、前向きに、肯定的に、かつ感謝と希望を持って生きること。これが十年以上巡礼記を書きながら「生涯を輝いて生きる道」と自覚したのではと自問する。

入院生活も一つの旅、上京する際に新幹線の中で読むために買い求めていた「終わった人」を病室で読もう。そしてこの巡礼の道もいろいろ書き続けようと思いながら目を閉じる。

８日間の絶食を支えてくれた点滴

入院したからと休むことなく書き続けようと思いながら目を閉じる。